

千葉県学習協『資本論』第1部講座（2023年3月19日）

講師：宮崎礼二（明海大学経済学部 准教授）

『新版 資本論』 第4分冊

第10回講座 3月19日

第七篇 資本の蓄積過程

第21章 単純再生産

第22章 剰余価値の資本への転化

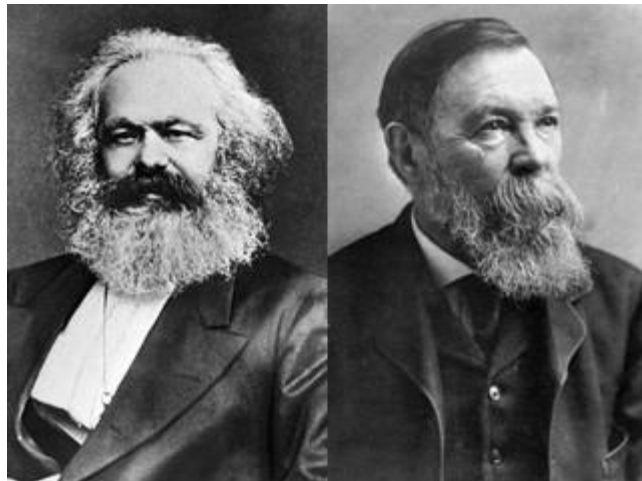
第11回講座 4月16日

第23章 資本主義的蓄積の一般的法則

第12回講座 5月21日

第24章 いわゆる本源的蓄積

第25章 近代的植民理論



新日本出版社新版ページ番号は【 】

（ ）内の番号はヴォルケ版『資本論』原書のページ番号を付記

第7篇 資本の蓄積過程

本篇の課題

「ある貨幣額が生産手段と労働力とに転化することは、資本として機能すべき価値分量が行なう第一の運動である。この運動は市場で、すなわち流通部面で行なわれる。運動の第二の局面である生産過程は、生産手段が商品に転化されると完了するが、その商品の価値はその構成諸部分の価値を超えており、したがって最初に前貸しされた資本に剰余価値を加えたものを含んでいる。これらの商品は、それからふたたび流通部面に投げ込まなければならない。これらの商品を売り、それらの価値を貨幣に実現し、この貨幣をあらためて資本に転化し、そしてこれらを絶えず新たに繰り返すことが必要である。いつも同じ継起的な諸局面を通過するこの循環は、資本の流通を形成する。」

【p. 981】(p. 589)

- ▶ 資本の生産過程の総括＝資本の蓄積過程
- ▶ これまでの剰余価値生産の分析を目的＝1回限りの生産・搾取の生産過程を分析
 - ⇒ しかし、生産過程は連続的・周期的であり、再生産過程である
 - ⇒ 1回限りの生産と搾取の結果が、どのように次の生産と搾取につながるのかの
流れの分析＝生産の連続的な流れ（資本の蓄積過程）のなかで考察
- ▶ 連続的な繰り返しの考察
 - ⇒ 新しい特徴、性質、規定、内容が浮かび上がってくる

本篇の分析方法と前提条件

▶ 第1の前提条件

「蓄積の第一の条件は、資本家が自分の商品を売り、それで得た貨幣の大部分を資本に再転化することをすでになし終えていることである。」

【p. 981】(p. 589)

＝「資本がその流通過程を正常に通過することが前提にされている。」【p. 981】(p. 589)

「商品を生産する資本家が商品とその価値どおりに売るものと想定」【p. 982】(p. 590)

⇒ 第1部での蓄積論の主題＝生産過程の分析 → 流通過程：第2部

▶ 第2の前提条件

「剰余価値を生産する資本家、すなわち不払労働を直接に労働者からくみ出して商品に固定させる資本家は、なるほどこの剰余価値の最初の取得者ではあるが、決してその最後の所有者ではない。」

【p. 982】(p. 589)

⇒ 資本主義的生産者＝「全剰余価値の所有者」

⇒ 資本家＝「獲物を分け合うすべての仲間の代表者」

→ 剰余価値の商人（利潤）、銀行家（利子）、地主（地代）への転化形態：第3部

▶ なぜ段階的に考察するのか？

「剰余価値の分割と流通の媒介運動とは、蓄積過程の単純な基本形態をあいまいにする。だから、蓄積過程を純粹に分析するためには、蓄積過程の機構の内的作用をおおい隠すいっさいの現象をしばらく度外視することが必要である。」【p. 983】(p. 590)

■ 古典派：基礎的な関係と高度な関係も平面に並存（土台も最上階も同じ平面）

リカード：価値法則と平均利潤率の法則を同じ平面で両立させ分析

■ マルクス：基礎的な関係から高度な関係への積み上げ（「発生論」的方法）

⇒ 単純から複雑へ

☞ 「以前のすべての経済学が、地代や利潤や利子という固定的な形態をもっている剰余価値の特殊な諸断片を、はじめから、与えられたものとして取り扱っているのとは反対に、僕は、まず第一に、すべてのこれらのものがまだ分解しないでいけば溶液状態で存在しているところの、剰余価値の一般的な形態を取り扱っているということ。」【全集③② p. 10】

▶ 第 21 章「単純再生産」

剰余価値が生産に投下されず、同じ規模での生産が繰り返されるケース

▶ 第 22 章「剰余価値の資本への転化」（＝拡大再生産）

剰余価値の一部または全部が資本に転化され、生産規模が拡大するケース

第二章 単純再生産

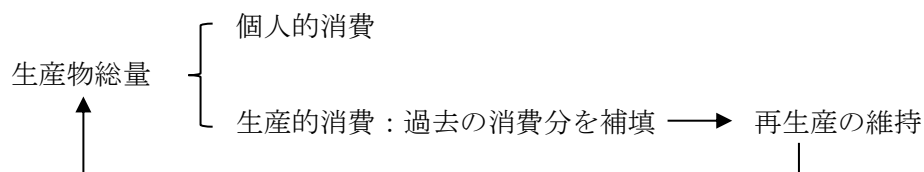
▶ 再生産過程

「生産過程は、その社会的形態がどのようなものであっても、継続的でなければならない。あるいは周期的に絶えず新たに同じ諸段階を通過しなければならない。社会は、消費することをやめることができないのと同様に、生産することをやめることはできない。だから、あらゆる社会的生産過程は、その恒常的な連関のなかで、またその更新の絶えざる流れのなかで考察すれば、それは同時に再生産過程である。」

【p. 984】(p. 591)

「生産の諸条件は同時に再生産の諸条件である。」

【p. 984】(p. 591)



「したがって、年々の生産物のうちの一定分量は生産のためのものである。」

【p. 984】(p. 591)

「生産が資本主義的形態をもつならば、再生産もそうである。資本主義的生産様式のもとでは、労働過程が価値増殖過程のための一手段としてだけ現れるのと同じように、再生産も、前貸価値を資本として、すなわち自己増殖する価値として再生産するための一手段としてだけ現れる。」
【p. 985】 (p. 591)

▶ 単純再生産

「資本価値の周期的な増加分、あるいは過程を進みつつある資本の周期的な果実として、剰余価値は資本から生じる収入という形態をとる。」
【p. 985】 (p. 592)

「この収入が資本家にとって消費元本としてだけ役立つとすれば、あるいは、周期的に獲得されるのと同じように周期的に消費されるならば、他の事情が変わらなければ単純再生産が行なわれる。」
【p. 985】 (p. 592)

- 資本家が生産過程で生まれた剰余価値を次の生産過程に追加資本として投下しないで、自分の個人的消費として使用するため、生産規模は同じまま繰り返されるケース

▶ 単純再生産を考察する意義

「ところで、この単純再生産は同じ規模での生産過程の単なる繰り返しであるとはいえず、こうした単なる繰り返しあるいは継続は、この過程にいくつかの新しい性格を刻印する、あるいはむしろこの過程が単に孤立した経過であるかのような外観上の性格を消滅させるのである。」
【pp. 985-986】 (p. 592)

■ 新しく見えてくる5つの内容

① 可変資本の本質 【pp. 986-989】 (pp. 592-594)

「彼は、剰余価値… (中略) …と同じように、彼自身の支払いの元本である可変資本を、それが労賃の形態で彼のもとに還流してくる以前に生産しているのであって、彼はこの元本を絶えず再生産する限りでのみ仕事を与えられる。ここから賃金は生産物そのものの分け前であるとする、第一六章のⅡに示した経済学者たちの定式が生じる。」
【p. 986】 (p. 592)

「労働者が生産手段の一部分を生産物に転化しているあいだに、彼の以前の生産物の一部分が貨幣に再転化される。きょう、あるいは今後半年間の彼の労働は、その前の週あるいはその前の半年間の彼の労働で支払われるのである。貨幣形態が生み出す幻想は、個々の資本家と個々の労働者との代わりに資本家階級と労働者階級とを考察すれば、ただちに消えてなくなる。」【pp. 986-987】 (pp. 592-593)

「したがって、可変資本は、労働者が彼の自己維持と再生産のために必要とし、どのような社会的生産体制のもとでもつねにみずから生産し再生産しなければならない生活手段の元本、あるいは労働元本の特殊な励起子の現象形態にすぎない。」
【p. 987】 (p. 593)

「もちろん、われわれが資本主義的生産過程をその更新の絶え間ない流れの中で考察するだけで、可変資本は資本家自身の元本から前貸しされた価値であるという意義を失ってしまう。」 **【p. 989】 (p. 594)**

⇒ 資本家が労賃を労働者に前貸しした可変資本は、生産の反復で考察すれば幻想である。

労働者は、生産のあいだ自分自身の維持・再生産しなければならない。そのための生活手段は、過去の自らの労働生産物であるが、資本主義的生産においては、労働過程は資本の価値増殖の手段であると同時に、労働生産物は労働者階級から疎外され、すべて資本家階級の所有になる。そのため、労働者には労賃が支払われるが、この支払が資本家による可変資本の前払い（前貸し）として現われる。だが、賃労働者の現在の労働は、労働者自身の過去の労働をもって支払われる。

② 総資本の内実 **【pp. 989-991】 (pp. 594-595)**

「資本主義的生産過程の単なる継続、すなわち単純再生産は、まだそのほかに、可変資本部分ばかりでなく総資本にもおよぶ独特な変化を引き起こす。」

【p. 989】 (p. 594)

「一定の年数が経過したのちには、彼が所有する資本価値は同じ年数のあいだに等価なしで取得した剰余価値の総額に等しく、彼が消費した価値額は最初の資本価値に等しい。」

【p. 990】 (p. 595)

「したがって、およそ蓄積というものをまったく無視しても、生産過程のたんなる継続、あるいは単純再生産は、長かろうと短かろうとある期間ののちには、すべての資本を、蓄積された資本または資本化された剰余価値に必然的に転化させる。資本は、それが生産過程にはいったときにはその使用者（企業家—フランス語版）がみずから働いて得た財産であったとしても、遅かれ早かれ、それは等価なしに取得された価値となる」

【p. 991】 (p. 595)

例：資本：£ 1000 毎年の剰余価値：£ 200

単純再生産 → 剰余価値 £ 200 = 資本家によって消費

→ 5年後：£ 200 × 5年 = £ 1000 = 消費され尽くした最初の資本
= 等価なしに資本家が取得した剰余価値

⇒ 一定期間の経過後、資本そのものが搾取によって得られた「不払労働の体化物」 **【p. 991】 (p. 595)** へと変身

③ 賃労働者の再生産・永久化 **【pp. 991-993】 (pp. 595-596)**

資本主義的生産様式の出発点 = 「一方には価値または貨幣の所有者、他方には価値を創造する実体の所有者が、すなわち一方には生産手段および生活手

段の所有者、他方には労働力以外にはなにももたない所有者が互いに買い手と売り手として相対」

【p. 991】 (p. 595)

「したがって、労働生産物と労働そのもとの分離、客体的な労働諸条件と主体的な労働力との分離が資本主義的生産過程の事実上与えられた基礎であり、出発点であった。」

【pp. 991-992】 (p. 595)

「しかし、はじめはただ出発点にすぎなかったものが、過程の単なる継続である単純再生産に媒介されて、資本主義的生産特有の成果として絶えず新たに生産され、永久化される。」

【p. 972】 (p. 595)

「労働者自身は絶えず客体的な富を資本として、すなわち彼にとっては外的であって彼を支配し搾取する力として、生産するのであり、そして資本家もまた絶えず労働力を富の源泉として、すなわち、主体的な、それ自身の対象化および現実化の手段から切り離された、抽象的な、労働者の単なる生身のうちに存在する富の源泉として、簡単に言えば労働者を賃労働者として生産するのである。労働者のこの不断の再生産あるいは永久化が、資本主義的生産の“不可欠の条件”である。」

【p. 992】 (p. 596)

⇒ 再生産されるのは生産物だけではなく、労働者階級が資本家階級によって搾取される搾取関係、資本主義的な生産関係そのものが再生産

④ 賃労働者の個人的消費の性格 【pp. 993-995】 (pp. 596-598)

「労働者の消費には二種類ある。」

【p. 993】 (p. 596)

生産的消費：労働によって生産手段を消費し、その価値を生産物に転化。

労働力を購入した資本家による労働者の労働力の消費。

個人的消費：労働力を売って支払われた貨幣を労働者は生活手段に費やす「労働者はしばしば、自分の個人的消費を生産過程の単なる付随事にするのを余儀なくされる。この場合、彼は、自分の労働力を動かし続けるために自分に生活手段を与えるのであって、それは蒸気機関に石炭や水が与えられ、歯車に油が与えられるのと同じである。その場合には、彼の消費手段は単に一生産手段の消費手段であり、彼の個人的消費は直接に生産的消費である。」

【p. 994】 (p. 597)

「われわれが、個々の資本家と個々の労働者ではなく、資本家階級と労働者階級を考察し、商品の個別的生産過程ではなく、資本主義的生産過程をその流れとその社会的な広がりにおいて考察するならば、事態は異なった趣を見せてくる。——資本家が自分の資本の一部分を労働力に転換すると、彼はそれによって自分の総資本を増殖する。彼にとっては一石二鳥である。彼は、自分が労働者から受け取るものから利益を得るだけでなく、自分が労働者に与えるものからも利益を得る。」

【pp. 994-995】 (p. 595)

「労働者階級の個人的消費は、資本によって労働力と引き換えに譲渡された生活手段の、資本によって新たに搾取されうる労働力への再転化である。それは、資本にとってもっとも不可欠な生産手段である労働者そのものの生産および再生産である。」

【p. 995】(p. 597)

「労働者階級の不断の維持と再生産は、資本の再生産のための恒常的条件である。」

【p. 995】(p. 598)

⑤ 「見えない糸」による資本への緊縛【pp. 997-984】(pp. 598-600)

「社会的観点から見れば、労働者階級は直接的な労働過程の外部でも、死んだ労働用具と同じように資本の付属物である。彼らの個人的消費でさえも、ある限界内では、ただ資本の再生産過程の一契機でしかない。しかしこの過程は、この自己意識のある生産用具が逃げだしてしまわないようになっており、そのために、彼らの生産物を絶えず彼らの極から資本という対極へと遠ざける。個人的消費は、一方では彼ら自身を維持し再生産するようになっており、他方では生活手段を使い果たさせることによって、彼らが絶えず労働市場に再出現するようになっていく。ローマの奴隷は鎖によって、賃労働者は見えない糸によって、その所有者につながれている。賃労働者の独立という外観は、個々の雇主が絶えず替わることによって、また契約という“法的擬制”によって維持されるのである。」

【pp. 997-998】(p. 599)

「資本主義的生産過程は、その特有の進行によって労働力と労働諸条件との分離を再生産する。資本主義的生産過程は、このことによって労働者の搾取諸条件を再生産し永久化する。それは労働者は生きるために自分の労働力を売ることをつねに強制し、資本家には致富のために労働力を買うことをつねに可能にする。資本家と労働者とが買い手と売り手として商品市場で互いに相対し合うのは、もはや偶然ではない。一方を絶えず自分の労働力の売り手として商品市場に投げ返し、また彼自身の生産物を絶えず他方の購買手段に転化させるのは、過程そのものの決まった筋書きである。事実上、労働者は、自分自身を資本家に売るまえに、すでに資本に属している。彼の経済的隷属は、彼自身の販売の周期的更新や、彼の個人的雇主の交替や、労働[力]の市場価格の変動によって、媒介されるとともにおおい隠されている。」

【pp. 1004-1005】(p. 603)

▶ 総括

- 「資本主義的生産過程は、その連関のなかで考察すれば、すなわち再生産過程としては、商品だけを、剰余価値だけを生産するのではなく、資本関係そのものを、一方には資本家を、他方には賃労働者を生産し、再生産するのである。」

【p. 1006】(p. 604)

第二章 剰余価値の資本への転化

第一節 拡大された規模での資本主義的生産過程。商品生産の所有法則の 資本主義的取得法則への転換

▶ 資本の蓄積

「どのように資本から剰余価値が生じるかはさきに考察したが、いまや、どのように剰余価値から資本が生じるかを考察することになる。剰余価値を資本として用いること、あるいは剰余価値を資本に再転化することは、資本の蓄積と呼ばれる。」

【p. 1007】 (p. 605)

「さしあたり、この経過を個別資本家の観点から考察しよう。」

【p. 1007】 (pp. 605-607)

- 剰余価値率 100% 投下総資本: 10,000G (不変資本: 8,000C、可変資本: 2,000V)
= 不変資本 4 : 可変資本 1

● 第1回目の生産

$$10,000 \left\{ \begin{array}{l} 8,000 (C) \\ 2,000 (V) \end{array} \right. \cdots \cdots P \cdots \cdots 12,000 \left\{ \begin{array}{l} 8,000 \\ 4,000 (2,000V + 2,000M) \end{array} \right.$$

● 第2回目の生産

- ① 追加資本部分: 2,000M を全て追加資本として蓄積・充用

$$2,000 \left\{ \begin{array}{l} 1,600 (C) \\ 400 (V) \end{array} \right. \cdots \cdots P \cdots \cdots 2,400 \left\{ \begin{array}{l} 1,600 \\ 800 (400V + 400M) \end{array} \right.$$

- ② 投下資本全体: 10,000 + 2,000M

$$12,000 \left\{ \begin{array}{l} 9,600 (C) \\ 2,400 (V) \end{array} \right. \cdots \cdots P \cdots \cdots 14,400 \left\{ \begin{array}{l} 9,600 \\ 4,800 (2,400V + 2,400M) \end{array} \right.$$

※ ①の追加資本 2,000 自体が生み出した 400M のさらなる追加資本としての運動

$$400 \left\{ \begin{array}{l} 320 (C) \\ 80 (V) \end{array} \right. \cdots \cdots P \cdots \cdots 480 \left\{ \begin{array}{l} 320 \\ 160 (80V + 80M) \end{array} \right.$$

■ 蓄積は累進的規模での資本の再生産に帰着

「一万ポンドの最初の資本は二〇〇〇ポンドの剰余価値を生み、それが資本化される。二〇〇〇ポンドの新資本は四〇〇の剰余価値を生み、これがふたたび資本化され、すなわち第二の追加資本に転化されて、八〇ポンドの新しい剰余価値を生む、等々である。」

【p. 1011】 (p. 607)

「最初の資本は一万ポンドの前貸によって形成された。その所有者はどこからこれを得たのか？彼自身の労働と彼の先祖の労働によってである！と経済学の代弁者たちはみな異口同音に答える。そして実際に彼の仮定は、商品生産の諸法則に合致する唯一のものであるかのように見える。」

【p. 1012】 (p. 608)

「二〇〇〇の追加資本については、まったく事情が異なる。その成立過程をわれわれはまさに正確に知っている。それは資本化された剰余価値である。」

【p. 1012】 (p. 608)

「資本家階級がこの貢物の一部で労働者階級から追加労働力を買うとすれば、たとえそれが十分な価格で買われ、そこで等価物どうしが交換されとしても、それはやはり、被征服者の商品を、被征服者から奪った貨幣で買い取るという、征服者の昔からのやり方と変わるものではない。」

【p. 1012】 (p. 608)

「労働者階級は、彼らの今年の剰余価値によって、次の年に追加労働を就業させるであろう資本をつくり出した。これがすなわち人が言うところの、資本によって資本を生み出すということのなである。」

【p. 1013】 (p. 609)

「第二の追加資本は第一の追加資本の剰余価値が資本化したものである。いまや、過去の不払労働を所有することが、生きた不払労働を、絶えず増大する規模で現在取得するための唯一の条件として現われる。資本家は、すでにより多く蓄積していればいるほど、ますます多く蓄積することができる。」

【p. 1013】 (p. 609)

▶ 商品生産の諸法則の資本主義的取得法則への転換

「追加資本第一号を形づくる剰余価値が、原資本の一部分による労働力の購入の成果であって、この購入が商品交換の諸法則¹に照応し、また法律的に見れば、労働者の側では彼自身の諸能力にたいする貨幣および商品所有者の側では彼に属する価値にたいする自由な処分権のほかにはなにも前提しない購買であった限りでは、また、追加資本第二号などが追加資本第一号の成果にすぎず、したがってあの最初の関係の帰結である限りでは、さらにまた、個々のどの取引も商品交換の法則に絶えず照応し、資本家はつねに労働力を買い、労働者はつねにそれを売り、しかも——われわれがそう仮定しようとするように——その売買は労働力の実際の価値どおりで行なわれる限りでは、商品生産および商品流通にもとづく取得の法則または

¹ 等価交換

私的所有の法則は、明らかに、それ独自の、内的な、不可避的な弁証法によって、その直接の対立物²に転換する。」 **【p. 1014】 (p. 609)**

「最初の操作として現われた等価物どうしの交換は、一転して、外観的にのみ交換が行なわれるようになる。というのは、労働力と交換される資本部分そのものが、第一には、等価なしに取得された他人の労働生産物の一部分にすぎず、第二には、その生産者である労働者によって補填されなければならないだけでなく、新しい剰余をとまって補填されなければならないからである。」 **【p. 1014】 (p. 609)**

「したがって、資本家と労働者のあいだの交換関係は、流通過程に属する外観にすぎないものとなり、内容そのもの³とは無縁な、内容を神秘化するだけの単なる形式になる。労働力の不断の売買は形式である。内容は、資本家が絶えず等価なしに取得するすでに対象化された他人の労働の一部分を、より大きな分量の生きた他人の労働と絶えず繰り返し取り替えるということである。」

【pp. 1014～1001】 (p. 609)

「最初われわれには、所有権は、自分の労働にもとづくものとして現われた。少なくとも、この仮定が妥当とされねばならなかった。なぜなら、平等な権利をもつ商品所有者だけが相対するのであり、しかし他人の商品を取得するための手段は自分の商品を譲渡することだけであり、そして自分の商品はただ労働によってのみ生産されうるものだからである。」 **【p. 1015】 (p. 609)**

(ところが)「所有は、いまや、資本家の側では他人の不払労働またはその生産物を取得する権利として現われ、労働者の側では自分自身の生産物を取得することの不可能性として現われる。所有と労働との分離は、外見上は両者の同一性から生じた一法則の必然的帰結となる。」 **【p. 1015】 (p. 610)**

▶ 取得法則の歴史的転換

「各々の交換行為 —— 個別的に見たそれ —— において交換の諸法則が守られる限り、取得様式は、商品生産に適合する所有権にはなんら触れることなしに、全面的な変革をこうむることができる。この同じ所有権は、生産物は生産者のものであり、生産者は等価物どうしを交換しながら、自分の労働によってのみ富を得ることができるという端緒の時期において有効であるのと同様に、社会の富が、絶えず増大する度合いで、他人の不払労働を絶えず新たに取得する立場にある人々の所有となる資本主義時代においても有効なのである。」 **【p. 1020】 (p. 613)**

「商品生産がそれ自身の内的諸法則に従って資本主義的生産に成長していくのと同じ度合いで、商品生産の所有諸法則は資本主義的取得の諸法則に転換する。」

【p. 1021】 (p. 613)

² 資本主義的取得法則

³ 剰余価値の取得によるさらなる剰余価値の無償での取得の繰り返し

⇒ 取得法則の転換が、自己労働にもとづく商品生産の資本主義的生産への歴史的「成長」によって生じる「歴史的転換」

第二節 拡大された規模での再生産にかんする経済学上の誤った見解

▶ 古典派経済学の誤り

- 「古典派経済学は、不生産的労働者によってではなく生産的労働者によって剰余生産物が消費されることを蓄積過程の特徴的契機として強調する限りでは、正しい。しかし、その誤りもまたここから始まる。」 【p. 1025】 (p. 615)

■ A・スミス

「蓄積を、単に、生産的労働者による剰余生産物の消費として、または剰余価値の資本化を、労働力への剰余価値の単なる転換として、説明することを流行させた。」

【p. 1025】 (p. 615)

・生産的労働者 = 工場労働者

・不生産的労働者 = 資本家の贅沢のための各種サービス提供者

⇒ 「リカードゥとその後のすべての人々がA・スミスの口真似をして、『収入のうち資本に追加されると言われる部分は生産的労働者によって消費される』と言っているが、これ以上に大きな誤りはない。この考え方によれば、資本に転化される剰余価値はすべて可変資本になるであろう。ところが、剰余価値は、最初に前貸しされた価値と同様に、不変資本と可変資本とに、生産手段と労働力とに、分かれる。」

【p. 1025】 (p. 616)

⇒ A・スミスのドグマ：商品の価格 = 労賃 + 剰余価値

【原注 32, p. 1028】 (p. 617)

= 不変資本の欠落

第三節 剰余価値の資本と収入への分割。節欲説

▶ 前提

- 前章：資本家の個人的な消費元本としてのみ考察（単純再生産）

本章：蓄積元本としてのみ考察

⇒ 「しかし、剰余価値は、単に前者だけでも後者だけでもなく、同時に両者なのである。剰余価値の一部分は資本家によって“収入”として消費され、他の一部分は資本として使用または蓄積される。」

【p. 1029】 (p. 618)

- 「剰余価値の総量が与えられている場合には、この両部分の一方が小さければ小さいほど、それだけ他方は大きいであろう。他のすべての事情を不変とすれば、この分割が行なわれる比率が蓄積の大きさを規定する。」

【p. 1030】 (p. 618)

= 蓄積率

▶ 蓄積は資本家による節約か？

- 「この分割を行なう者は、剰余価値の所有者、すなわち資本家である。したがって、この分割は資本家の意志行為である。」 【p. 1030】 (p. 618)
- 「彼が蓄積する部分について、人は、彼がそれを節約するのだ、と言う。」
⇒「資本家としての自分の機能、すなわち自分を富ませるという機能を果たす」
【p. 1030】 (p. 618)

▶ 資本の累進的蓄積と競争の強制法則

- 「資本家は人格化された資本である限りにおいてのみ、一つの歴史的価値をもち、…（略）…あの歴史的な存在権をもつ。その限りでのみ、彼自身の一時的な必然性が、資本主義的生産様式の一時的な必然性のうちに含まれる。」 【p. 1030】 (p. 618)
- 「使用価値と享受ではなく、交換価値とその増殖とが、彼の推進的動機である。価値増殖の狂信者として、彼は容赦なく人類を強制して、生産のために生産させ、したがって社会的生産諸力を発展させ、そしてまた、各個人の完全で自由な発展を基本原理とするより高度な社会形態の唯一の現実的土台となりうる物質的生産諸条件を創造させる。」 【p. 1030】 (p. 618)
- 「貨幣蓄蔵者の場合に個人的熱狂として現われるものが、資本家の場合には社会的機構の作用なのであって、この機構のなかで彼は一個の動輪にすぎない。そのうえ、資本主義的生産の発展は、一つの産業的企業に投下される資本が絶えず増大することを必然化し、そして競争は個々の資本家にたいして、資本主義的生産様式の内在的諸法則⁴を外的な強制法則として押しつける。競争は資本家に強制して、彼の資本を維持するために絶えず資本を拡大させるのであるが、彼は累進的蓄積によってのみそれを拡大することができる。」 【pp. 1030-1031】 (p. 618)

▶ 資本蓄積と節欲・節約

- 「資本主義的生産の進展は、享樂の世界を創造するだけではない。それは投機や信用制度とともに、突然の致富の無数の源泉を開く。ある一定の発展度に達すれば、富の誇示であると同時に信用の手段でもある世間なみの浪費が、『不幸な』資本家のむしろ営業上の必要となる。奢侈が資本の交際費には入り込む。もともと資本家は、貨幣蓄蔵者と違って、彼の個人的労働や彼の個人的不消費に比例して富裕になるのではなく、彼が他人の労働力を搾取する程度、また労働者に生活上の享樂をすべて禁欲するように強制する程度に応じて富裕となる。だから、資本家の浪費は、放縦な封建領主の浪費のような、“あけっぴろげな” 性格をもつ

⁴ 不断の価値増殖

ているのではなく、その背後には、むしろつねにもっともきたならしい食欲とともっともこせこせいした打算が潜んでいるとはいえ、それでも彼の浪費は彼の蓄積につれて増大するのであって、一方が他方を中断させるわけではない。それと同時に、資本家個人の気高い胸のうちでは、蓄積衝動と享楽衝動とのあいだのファスト的葛藤⁵が展開される。」【p. 1034】(p. 620)

- 「蓄積せよ、蓄積せよ！これがモーゼであり、予言者たちである！『勤勉は材料を供給し、この材料を節約が蓄積する。』だから節約せよ、節約せよ、すなわち剰余価値または剰余生産物のうち、できる限り大きな部分を資本に再転化せよ！蓄積のための蓄積、生産のための生産、この定式で古典派経済学はブルジョア時代の歴史的使命を表明した。」【p. 1036】(p. 621)

第四節 剰余価値の資本と収入とへの比例的分割から独立して蓄積の規模を規定する諸事情 ——労働力の搾取度、労働の生産力、使用される資本と消費される資本との差額の増大、前貸資本の大きさ

▶ 課題

「蓄積の大きさの規定にさいしては、剰余価値の総量を規定する諸事情のすべてが一緒に作用する。われわれは、ここでもう一度これらの事情を、それが蓄積にかんして新たな観点を提供する限りで、概括しよう。」【p. 1044】(p. 626)

▶ 事情① ——労賃の引き下げ

「剰余価値率はまず第一に労働力の搾取度に依存する、ということが想起される。経済学はこの役割を非常に重視するあまり、ときには労働の生産力の上昇による蓄積の促進を、労働者の搾取の強化による蓄積の促進と同一視するほどである。剰余価値の生産にかんする諸篇では、労賃は少なくとも労働力の価値に等しいということがつねに想定されていた。けれども、実際の運動では、労賃をこの価値よりも強制的に引き下げることがあまりにも重要な役割を演じているので、われわれはしばらくこの点について論じざるをえない。この引き下げは、事実上、一定の限界内で、労働者の必要消費元本を資本の蓄積元本に転化する。」

【pp. 1044-1045】(p. 626)

⇒ 労賃の引下げ：搾取率引き上げ

- ・ 労賃の労働力価値以下への暴力的引下げ
- ・ 同一労賃のままでの労働日延長、労働強化等

→ 搾取率引き上げ = 剰余価値増大による蓄積

⁵ 「神と悪」といった人間に内在し、対立するもの同士の葛藤（ゲーテ『ファウスト』）

▶ 事情② ——社会的労働の生産性の程度

「資本の蓄積におけるもう一つの重要な要因は、社会的労働の生産性の程度である。労働の生産力の上昇とともに、一定の価値を、したがってまた与えられた大きさの剰余価値を表わす生産物の総量が増大する。」 **【p. 1053】 (p. 631)**

「新価値を創造しながら旧価値を維持⁶するということは、生きた労働の天分である。だから労働は、その生産手段の効果や規模や価値の増大につれて、したがって労働の生産力の発展にともなう蓄積につれて、絶えず膨張する資本価値をつねに新しい形態で維持し、永久化する。」 **【p. 1056】 (p. 633)**

⇒ 社会的労働の生産性の程度：労働生産性の上昇

→ 生産物総量の増大 + 商品単価の低下

・ 生産手段も労働力も低廉化

= 同量の資本でより多くの生産手段と労働力が機能

→ 剰余価値の増大による蓄積加速化

▶ 事情③ ——固定資本の無償の役立ち

「資本の増大とともに、使用された資本と消費された資本との差額が増大する。言い換えると、建物、機械、排水管、役畜、各種の装置のように、長期あるいは短期にわたり、絶えず繰り返される生産過程のなかでそのものの全体として機能し、あるいは一定の有用効果をあげるために役立つ労働手段の価値量や素材量は増大するが、他方、それらの労働手段はただ漸次的にしか摩滅せず、だからそれらの価値を一部分ずつ失うだけであり、したがってまた一部分ずつその価値を生産物に移転するだけである。これらの労働手段は、生産物に価値をつけ加えることなしに生産物形成者として役立つその程度に応じて、したがって、全部的に使用されながら部分的にしか消費されないその程度に応じて、すでに述べたように、水、蒸気、空気、電気などのような自然力と同様に無償の役立ちをするのである。過去の労働のこの無償の役立ちは、生きた労働によって利用され生気を与えられるとき、蓄積の規模の増大とともに累積されていく。」 **【pp. 1059-1060】 (p. 635)**

⇒ 固定資本の無償の役立ち：充用資本と消費資本の差額

・ 労働手段の無償の生産物の増加 → 剰余価値の増大

▶ 事情④ ——生産のすべてのばねの精力的働き

「継続的な蓄積によって資本が増大すればするほど、消費元本と蓄積元本とに分かれる価値総額もそれだけ増加する。それだから、資本家はいつそうぜいたくな暮らしをしながら、同時より多く『禁欲』…することができる。こうして結局、前貸資

⁶ 生産手段の価値

本の総量につれて生産の規模が拡大されればされるほど、生産のすべてのばねがますます精力的に働くのである。」【p. 1061】(p. 636)

⇒ 生産のすべてのばねの精力的働き：投下資本額

- ・ 投下資本額と蓄積規模とは相互促進的關係
＝ 剰余価値量の規定要因

第五節 いわゆる労働元本

▶ 労働元本の大きさ

- 「資本は固定的な大きさのものではなく、社会的富のうちの弾力的な、剰余価値の収入と追加資本とへの分割につれて絶えず変動する一部分である。」

【p. 1061】(p. 636)

→ 古典派経済学

「社会的資本を、固定した作用として固定した大きさのものと把握」

【p. 1062】(p. 636)

⇒ 「このドグマは、ベンサム自身によっても、またマルサス、ジェイムズ・ミル、マカロックなどによっても、弁護論的な目的のために、とりわけ資本の一部分を、すなわち可変資本または労働力に転換されうる資本を、一つの固定した大きさのものとして描くために利用された。可変資本の素材的存在、すなわち、可変資本が労働者のために代表する生活手段の総量、またはいわゆる労働元本は、社会的富のうちで、自然の鎖で縛られて超えることのできない特殊部分だとでっち上げられた。」

【pp. 1062-1063】(p. 637)

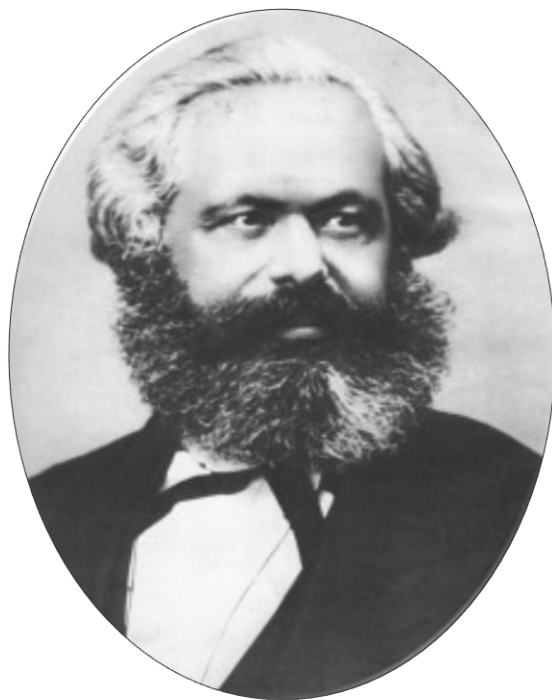
⇒ 「一方では労働者は、社会的富を非労働者の消費手段と生産手段とに分割するさいに口をはさむ権利がないということ、他方では労働者は、好運な例外的場合のみ、富者の『収入』の犠牲においていわゆる『労働元本』を拡大することができるということである。」

【p. 1063】(p. 638)

⇒ 「労働元本の資本主義的制限をその社会的な自然的制限につくり変えることが、どんなにばかばかしい同義反復に行きつくか」

「すなわち言葉を換えて言えば、われわれはまず最初に、実施に支払われる個人的労賃を合計し、次にこの合計が神と自然とにより定められた『労働元本』の価値総額をなす、と主張する。最後にわれわれは、こうして得られた総額を労働者の頭数で割って、またしても労働者が個々人で平均してどれだけを受け取りうるのかを発見する。これはとんでもないずるいやり方である。」

【p. 1067】(p. 638)



千葉県労働者学習協会
『資本論』第1巻第4分冊（講義⑩）